

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00589

研究課題名（和文）琉球諸方言の指示詞の研究—日琉祖語の解明を目指して—

研究課題名（英文）A study of demonstratives in Ryukyuan languages: Toward an elucidation of Proto-Japonic

研究代表者

衣畑 智秀 (Kinuhata, Tomohide)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：80551928

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：琉球諸方言には二系列の指示詞を持つ方言と三系列の指示詞を持つ方言が存在する。この背景として、直示に二系列、照応に一系列の指示体系が想定されるが、1) そのような指示体系は琉球諸方言に存在するのか、2) 琉球諸方言の指示体系にはどのようなものがあるのか、3) 古代日本語の指示体系とはどう関係し、4) 日琉の祖語にはどのような指示体系が想定されるか、を追究した。その結果、上の体系は、1) 宮古語伊良部方言だけでなく、2) 南琉球にも近いものが確認され、3) 古代日本語とも共通するため日琉祖語に遡る可能性があり、4) 日琉祖語には直示に*ko-、*ka-、照応に*so-が再建されることを実証的に示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの琉球諸方言の指示詞の研究は、語形の記述とその直示用法を対象としたものがほとんどであった。よって、照応用法も含めた琉球諸方言の総合的な指示詞研究はほとんどなされていなかった。また、古代日本語の研究も日本語史の問題として扱われるのみで、琉球諸方言の指示体系との関係で論じられることはほとんどなかった。本研究では、琉球諸方言の記述をもとに、琉球祖語や日琉祖語の指示体系に迫って行く点に、学術的意義がある。また、日琉の祖語を解明しようとする試みは、これまで主に音韻論の分野が中心であり、本研究のように、文法体系からのアプローチが少ない点でも、研究の意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：While many dialects in Ryukyuan have three-series demonstratives, some have only two. Assuming a proto-system with two deictic and one anaphoric pronoun can account for this divergence. Built on this assumption, we further investigated 1) whether the proto-system is still in use in Ryukyuan dialects, 2) how other systems in Ryukyuan languages are derived from it, 3) how it relates to the system of Old Japanese, and 4) what system is posited for Proto-Japonic demonstratives. Our findings are 1) the demonstrative system in Irabu-Miyako Ryukyuan is similar to the proto one, 2) similar systems to that of Irabu are found in South Ryukyuan, 3) Old Japanese also had two deictic and one anaphoric pronoun, and 4) we can reconstruct *ko- and *so- for deictics and *ka- for the anaphoric in the Proto-Japonic demonstrative system.

研究分野：言語学

キーワード：指示詞 日琉祖語 琉球諸方言 上代日本語 直示 照応

1. 研究開始当初の背景

琉球諸方言には二系列の指示詞を持つ方言と三系列の指示詞を持つ方言が存在する。北琉球諸方言で三系列の指示詞を持つ場合、その形態には ku-, u-, a-の三つが認められる。一方、南琉球諸方言の場合、ku-, u-, ka-の三つになる(内間 1984、中本 1983)。よって、そこから琉球祖語には*ko-, *o- (o>u という狭母音化を想定) という二つの指示形態素を建てることができ、それともう一つ*a-もしくは*ka-から遡る形態素(仮に*(k)a-)があったと考えられる。このように、琉球祖語には三つの形態素があったと考えられる一方、琉球諸方言には、二つの指示詞形態素しか持たない方言が散在し、しかもその二系列の方言には、*ko-, *o-, *(k)a-のいずれの組み合わせのものも見られる(竹富町祖納: ku-対 u-, 国頭村奥: ku-対 a-, 宮古島市狩俣: u-対 ka-)。このように、琉球諸方言は三種類の指示形態素を持ちながら、二系列を指向する傾向があるため、筆者らは琉球祖語の指示体系が、直示に二系列、照応に一系列となる、図 1 のようなものだったのではないかと考えた(Kinuhata and Hayashi 2018)。ここからたとえば三系列の直示を持つ方言は、照応の*o-が直示用法を獲得することによって成立し、二系列の形態素しか持たない方言は、*o-が直示用法を獲得する過程で*ko-もしくは*ka-と合流することにより、*ko-, *o-, *(k)a-のいずれかが失われて成立したと説明することができる。

	直示	照応
近称	*ko-	*o-
遠称	*(k)a-	

図 1 : 琉球祖語

しかし、図 1 のモデルは、三系列の直示の形態素を持つ宮古新里方言と、二系列の指示詞を持つ宮古狩俣方言から推定したものであり、実際に図 1 のような指示体系が琉球諸方言に確認されたわけではなかった。また、図 1 の体系は三系列のうち二系列の指示体系が混ざって散見される琉球諸方言の祖体系として建てられるものであるが、宮古語以外の琉球諸語の実態、すなわち、各方言での直示の使い分けや何が照応を表すかは明らかにされていなかった。さらに、琉球祖語に図 1 のような体系が建てられるとして、日本語、とりわけ上代日本語との関係についても課題として残っていた。

2. 研究の目的

以上のような研究背景のもと、以下の 4 点を明らかにすることを目的とする。

- 1) 本研究では祖体系として建てられるような指示体系(図 1)を持つ方言は琉球列島に存在するのか。
- 2) 琉球諸方言の指示体系の実態にはどのようなものがあり、祖体系からどのように成立したと考えられるのか。
- 3) 古代日本語の指示体系はどのようなものか。
- 4) 琉球諸語と古代日本語から日琉祖語の指示体系はどのようなものと考えられるか。

3. 研究の方法

琉球諸方言における指示詞の調査は主に面接調査によって行った。

直示のための調査(現場用法)では、ビデオカメラを話者の後方に設置して、空間に存在する指示対象をどのような指示詞で指すかを記録した。場面の設定は、話し手と聞き手が向かい合って座る「視点对立型」と、話し手と聞き手が隣り合って座る「視点融合型」を区別し、それぞれに一つの対象を指す「単独指示」と二つの対象を比べて指す「比較指示」を調査した。以上の 4 区分において、話し手の手元、聞き手の手元、お互いから離れた場所などをどのように指すかを調べた。

照応のための調査(非現場用法)には、衣畑(2017)で公開している調査票を用いた。前文で導入された指示対象について、対話者間での知識の共有と、対話者からの距離によって、指示詞の使い分けを見た。前者は対話者がお互いに知っている対象、話し手だけが知っている対象、聞き手だけが知っている対象を区別した。後者では遠くに実在するもの、近くに実在するもの、実在しないもの(夢の中など)を区別した。これ以外に、話し手が対象を思い出しながら指す「記憶指示」、後続する文脈に出てくる対象を指す「後方照応」、指示詞が変項として機能する「束縛変項照応」についても調査した。

古代日本語の調査では、『日本語歴史コーパス』を用い、上代日本語の韻文(万葉集)平安前期~中期の韻文(三代集)と散文(竹取・伊勢物語など)から用例を収集した。それらを、先行詞の有無、名詞句の意味カテゴリ、時制、可視/不可視、対話者からの距離によって分類し、各指示形態素(コ、ソ、カ)の指示特徴を客観的に示すデータの構築を行った。

4. 研究成果

1) 宮古伊良部方言の指示体系(衣畑 2021)

宮古諸島のうちの一つ伊良部島の中にある伊良部集落の調査を行った。話者は男性二名(1924 年生、1930 年生)である。以下、現場用法、非現場用法の順に調査結果を述べる。

- 現場用法

視点对立型： 向かい合った話し手から聞き手までの空間は ku-で指すことができる。一方、話し手・聞き手から離れた空間は ka-を用いる。誘導すれば、u-で聞き手の近くの空間を指すことも可能だが、ここは ku-でも指すことができ、u-独自の空間とは言えない。唯一、u-独自の指示領域と認定できるのは、聞き手が遠く離れている場合に、聞き手の近辺を指す場合である。しかし、この場合でも、二つの対象を比較する場合には、1924 年生の話者は ka-を用いることができる（図 2）。

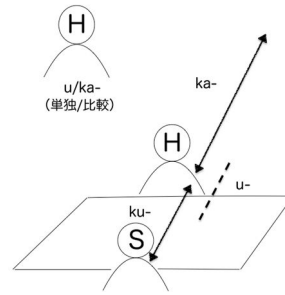


図 2:視点对立型

視点融合型： 話し手・聞き手の近辺は ku-で、離れると ka-が用いられる。u-は誘導しなければ使われない。特に二つの対象を比べる場合は ku-と ka-によって対象を対比する。

- 非現場用法

現場用法において、u-が出て来にくいのに反し、非現場用法では u-がきわめて広く用いられる。前文脈に導入した指示対象を指す、前方照応のための調査では、対話者間の共有知識や対話者からの距離に関係なく、u-を用いることができる。たとえば宮古狩俣方言では前文脈で導入される人が対話現場から遠く離れていると認識されれば ka-が用いられる(1a)が、伊良部方言では u-が使われる(1b)（#は当該の文脈では不自然であることを表す）。

(1) (聞き手が「昨日、下地さんという人に会ったよ」と言うので、)

a. {#uri/kari}=a nootsi=nu putu=du a-tai? (狩俣方言)

b. {unu/#kanu} pitu=a noosi=nu pitu=ga a-taa? (伊良部方言)

(その人はどんな人だった?)

また、現代日本共通語で遠称のア系列が用いられる対話者がお互い知っている対象を指す場合(2)や、話し手が思い出しながら対象を指す記憶指示(3)にも u-が使われる。

(2) (京都で一緒に料理を食べただろう?)

{uri/?kari}=u foo-ki ika. (あれを食べに行こう)

(3) (沖縄本島で食べたお菓子はおいしかったなあ。)

{uri/?kari}=a noo=tii ndzi koosi=ga ata=ai? (あれば何という名前だったかな?)

以上から、現場用法(→直示)ではもっぱら ku-と ka-の二つの指示形態素が使われ、非現場用法ではもっぱら u-が使われると言え、伊良部方言の指示体系は祖体系として建てた図 1 の指示体系にきわめて近いことがわかる。つまり、直示に二系列、照応に一系列ある体系は、理論的に仮構されるだけでなく、実際に琉球諸語に使われている体系であることが明らかになった。

2) 奄美語・八重山語の調査(新永 2024、および今後発表予定)

研究協力者に依頼し、奄美語湯湾方言(新永悠人・弘前大学)、八重山語黒島方言(原田走一郎・長崎大学)の調査を行った。どちらも ku-、u-、(h)a の三つの系列を持つ。

2-a) 奄美語湯湾方言

話者は男性一名(1953 年生)、現場用法、非現場用法の順に述べる。

- 現場用法

視点对立型: 単独指示では話し手の手元を ku-、聞き手の手元を u-、話し手・聞き手から離れた場所を a-で指すが、u-がやや広く使え、話し手の手元から聞き手の手元および両者からやや離れた場所までをカバーできる。一方比較指示になると、ku-が聞き手の手元を指せ、ku-と u-、ku-と -a-のペアが使える。

視点融合型: ku- (近) u- (中) a- (遠) が距離に応じて使い分けられる。ただし、ku-の指す範囲が広くやや離れた場所(中)にも使える。比較指示の場合も同様で、u-と a-のペアだけでなく ku-と a-のペアでも中～遠を比較できる。

- 非現場用法

前方照応では指示対象をお互い知っている場合には a-が、話し手のみもしくは聞き手のみが知っている場合には u-が使われる傾向がある。ただし、お互いに知っていても u-が使われる場合もある。後方照応も ku-が原則だが u-が使われることもある。

2-b) 八重山語黒島方言

話者は男性一名(1939 年生)、現場用法、非現場用法の順に述べる。

- 現場用法

視点对立型: 単独指示では話し手の手元を ku-、聞き手の手元を u-、話し手・聞き手から離れた場所を ha-で指すように見えるが、聞き手の手元を ku-で指すこともでき、ku-と u-の指す場所が(聞き手が離れない限り)重複する。比較指示ではほとんど u-を用いず、ku-と ha-のペアのみが頻用される。話し手と聞き手の手元の対象を比較する場合には、話し手側が ku-で、聞き手が ha-で指される。

視点融合型: 話し手の手元を ku-、やや離れると ha-が用いられる。話し手の手元は u-でも指せ、ku-と違いはなさそうである。比較指示でも ku-と ha-がペアになるが、この場合は距離に関係なく、最初に指す方に ku-、後に指す方に ha-を用いる。

- 非現場用法

非現場用法では u- がきわめて広く用いられる。前文脈に導入した指示対象を指す、前方照応のための調査では、対話者間の共有知識や対話者からの距離に関係なく、u- を用いることができる。また、記憶指示や後方照応にも u- を用いることができる。合わせて、ku- も同様に用いることができ、u- と ku- は照応に関して違いがないように見える。

八重山語黒島方言については、照応において u- と ku- が近い用法を持つ以外、宮古伊良部方言に指示機能が近く、南琉球でこのタイプの指示体系が広く分布している(た)可能性を示唆する。奄美語湯湾方言の指示体系は一見現代日本共通語に近いが、現場用法で u- が広く使える点は琉球語の特徴を示していると解釈できる。

3) 上代日本語の指示体系 (衣畑 2022)

万葉集を資料として、上代語の指示形態素コ-、ソ-、カ-の指示特徴について考察した。まず、上代語研究の伝統的な方法に習い、仮名表記と訓字表記、奈良方言と東国方言で、用例を区分した。その上で、指示詞の使われる状況を綿密に分析した。従来の研究ではコ-、ソ-、カ-の用例の指示自体に言及してその指示特徴を説明する傾向が見られたが、我々現代人に直接わかるのはコ-、ソ-、カ-の指示ではなく、これらが使われる状況しかない。コ-、ソ-、カ-の使われる状況に着目することで、これらがどのような状況で使われるかを包括的に分析することができることを示した。

まず、表記に関しては、仮名表記と訓字表記の間には、それぞれのコ-、ソ-、カ-で読まれる用例の分布に、顕著な違い (= 統計的な有意差) はなく、これらが同じ母集団 (= 上代奈良方言) から取られたと結論できた。一方、東国方言について、奈良方言の使用との間に 5%水準で有意差は認められなかったものの、きわめてそれに近い確率で (フィッシャーの正確確率検定で $p=.063$) 両者に異なる指示詞の使い方の特徴があることが示唆された。

次に、表記は違えど同じ母集団の使用法と結論された奈良方言の例について、コ系列とソ系列における用法の差について統計的に検討した。その結果、ソ系列はコ系列よりも、有意に前文脈に先行詞を持つ例が多く (111 例対 43 例)、また先行詞がない場合でも有意に非可視的な例を指示する例が多かった (23 例対 2 例)。一方、コ系列の特徴としては、先行詞がない場合には、有意に可視的な対象を指示する例がソ系列よりも多かった (85 例対 1 例)。この結果は従来「上代のコには... 文脈指示は概して少なく、空間的指示への傾斜が強い。ソが文脈指示に片寄る」(橋本 1966: 214)、「ソ・ソレともに、明らかに現場指示と認め得るものがない」(橋本: 219) と言われて来たことを統計的に実証したものと言える。

しかし一方で、従来の研究がコ-のみが広く空間内の対象を直示的に指せ、遠称のカ-が未発達であったとする点には問題があると考えられる。統計的な調査から、コ-は話し手の近辺の指示対象を指す例がほとんどで、遠方を指していると解釈できそうな例は 3 例のみであり、「山」「雨雲」など視覚的に大きく感じる対象のみであった(4a)。一方、カ-にも可視的な空間の離れた対象を指していると解釈できる例が 2 例ある(4b)ため、コ-とカ-が可視的な空間を近遠で表し分けていた可能性がある。

- (4) a. こ(許)の見ゆる 雲ほびこりて との曇り 雨も降らぬか 心
足らひに(万葉集 4123)
b. 誰そ**かれ**(彼)と 問はば答へむ すべをなみ 君が使ひを
帰しつるかも(万葉集 2545)

	直示	照応
近称	コ-	ソ-
遠称	カ-	

図 3: 上代日本語

もしそうだとすると、上代日本語の指示体系は、直示にコ-、カ-の二系列、照応にソ-の一系列があることになり、琉球祖語の体系 (図 1) に極めて近い、図 3 のような体系であった可能性がある。

4) 日琉祖語の指示詞の再建 (Kinuhata2023、論文執筆中)

琉球祖語と上代日本語に想定される指示体系 (図 1, 2) を比較すると、日琉祖語でも直示に二系列、照応に一系列の指示体系であったことが示唆される。しかし、直示の近称が *ko- (コ-) であることは共通しているが、他の形態素が何であったのかは明らかになっていない。本研究では、指示詞の形態変化に関する理論を提示し、日琉祖語の直示の遠称は *ka- (カ-)、照応は *so- であり、*a- および *o- はそこから派生した形態であると考えた。

● 指示形態素の形態変化についての理論

形態変化についての理論は、言語変化によく例証される三つのプロセスからなっている。すなわち a) 複合、b) 類推、c) 音韻縮約の三つからなる。以下、指示副詞の形態変化から例証する。

a) **複合**: 上代日本語には ka-と sika-という二つの指示副詞があり、ka-は直示的に、sika-は照応的に用いられる。ka-は琉球諸語にも近称の指示副詞として広く確認される日琉祖語に遡る形式(*ka-)である(ただし遠称の ka-との関係は不明)。sika の si-は照応の代名詞として使われることがある。sika も照応として使われるので、この照応の si-と副詞的な機能を持つ ka-が複合したものと言える。日琉祖語に遡る*ka-は琉球諸語においても他の指示形態素と複合する。たとえば、図 4 奄美名瀬方言の u-ga(-si)、a-ga(-si)という中称、遠称の指示副詞は、名詞系列に見られる指示形態素 u-、a-が近称の指示副詞の(*ka->) ka(-si)と複合したと考えられる。

	近称	中称	遠称
名詞	ku-ri	u-ri	a-ri
副詞	<u>ka(-si)</u>	<u>u-ga(-si)</u>	<u>a-ga(-si)</u>

図 4: 奄美名瀬方言 (中本 1983)

b) **類推**: 上代日本語の上記 sika は平安時代になると sa-に取って代わられた。この変化の背景にあるのは 4 項比例式による類推である (ko-直示:名詞:ka-直示:副詞 = so-照応:名詞:X 照応:副詞) これとは異なる種類の類推として拡張による類推も挙げられる。図 5 に示した徳之島天城方言では名詞系列に見られる ku- vs. u- vs. a-の対立が副詞系列に類推的に拡張し、日琉祖語の*ka-を失っている。

	近称	中称	遠称
名詞	ku-ri	u-ri	a-ri
副詞	ku-ssi	u-ssi	a-ssi

図 5: 徳之島天城方言 (中本 1983)

c) **音韻的縮約**: 上代日本語の遠称を表す ka-は特に鎌倉時代以降頭子音の/k/を弱化させ a-へと音韻的な縮約を起こしたと考えられる。縮約が起こっても、a-は ko-や so-といった他の指示形態素からは弁別的である。奄美湯湾方言にも音韻縮約は見られる。湯湾方言の図 6 を名瀬方言の図 4 と比べると、中称の*u-ga(-n)が ga(-n)へと縮約されているのがわかるが、ga(-n)は ka(-n)とも a-ga(-n)とも区別されている。

	近称	中称	遠称
名詞	ku-ri	u-ri	a-ri
副詞	<u>ka(-n)</u>	<u>ga(-n)</u>	<u>a-ga(-n)</u>

図 4: 奄美湯湾方言 (Niinaga 2014)

以上の理論を踏まえると、直示の*ka-が a-へ、照応の*so-が o-へ縮約を起こしたことが想定され、日琉祖語の直示・遠称には*ka-を、照応には*so-を建てることことができる。逆に*o->so-といった変化は複合や類推でも予測できない。加えて、指示詞の/k/や/s/が弱化することは琉球諸語や日本語本土諸方言で観察され、本研究の妥当性を補強している。

【文献】橋本四郎 (1966)「古代語の指示体系—上代を中心に—」『国語国文』35(6) (『橋本四郎論文集 国語学編』(角川書店)に再録) / 衣畑智秀(2017)「宮古狩俣方言における指示詞使用の個人差」『福岡大学研究推進部論集 A: 人文科学編』17(4): 45-50. / 衣畑智秀 (2021)「琉球諸語と上代日本語からみた祖語の指示体系試論」『フィールドと文献からみる日琉諸語の系統と歴史』, pp. 190-213, 開拓社 / 衣畑 (2022)「上代語指示詞の指示特徴---文献を用いた観察データの構築法」『福岡大学人文論叢』54(3): 629-670 / Kinuhata, Tomohide (2023) Reconstructing the Proto-Japonic demonstrative system. ICHL 26. / Kinuhata, Tomohide and Yuka Hayashi (2018) On the anaphoric use of demonstratives in Miyakoan. *Japanese/Korean Linguistics* 25, pp. 35-47, CSLI. / 中本正智 (1983)「指示代名詞の構造と祖形」『琉球語彙史の研究』, pp. 168-186, 三一書房 / Niinaga, Yuto (2014) A Grammar of Yuwan, a Northern Ryukyuan Language. Phd-thesis, The University of Tokyo. / 新永悠人 (2024)「北琉球奄美大島湯湾方言の指示詞における直示と照応の初期報告」沖縄言語研究センター一定例研究会 / 内間直仁 (1984)『琉球方言文法の研究』笠間書院

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Kinuhata Tomohide	4. 巻 -
2. 論文標題 Chapter 13 Scope ambiguity and the loss of NPI feature: Evidence from the history of Japanese scalar particle dani	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Polarity-Sensitive Expressions	6. 最初と最後の頁 415--452
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/9783110755121-013	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 衣畑智秀	4. 巻 7(1)
2. 論文標題 Syntax/Semantics discrepancy in the grammaticalization of resultatives: Evidence from Karimata-Miyako Ryukyuan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Glossa: a journal of general linguistics	6. 最初と最後の頁 1--32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.16995/glossa.5858	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 衣畑智秀	4. 巻 54(3)
2. 論文標題 上代語指示詞の指示特徴---文献を用いた観察データの構築法	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福岡大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 629--670
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 衣畑智秀	4. 巻 29
2. 論文標題 宮古伊良部集落方言の音調	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福岡大学日本語日本文学	6. 最初と最後の頁 58--43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 新永悠人
2. 発表標題 北琉球奄美大島湯湾方言の指示詞における直示と照応の初期報告
3. 学会等名 沖縄言語研究センター定例研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Kinuhata, Tomohide
2. 発表標題 Reconstructing the Proto-Japonic demonstrative system
3. 学会等名 ICHL 26 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 衣畑智秀
2. 発表標題 談話の焦点からみた係り助詞力の生起位置 万葉集の上代中央語を対象に
3. 学会等名 日本語文法学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 衣畑智秀
2. 発表標題 宮古狩俣方言の結果相ufuの文法化 統語と意味のミスマッチ
3. 学会等名 日本言語学会第162回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tomohide Kinuhata
2. 発表標題 Information structure of the Irabu dialect in Southern Ryukyus
3. 学会等名 Linguistics and Asian Languages 2022 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 林由華・衣畑智秀・木部暢子 (編)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 296
3. 書名 フィールドと文献からみる日琉諸語の系統と歴史	

1. 著者名 筑紫日本語研究会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 518
3. 書名 筑紫語学論叢	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>琉球諸方言の指示詞の研究 ---日琉祖語の解明を目指して---</p> <p>https://www.cis.fukuoka-u.ac.jp/~tkinuhata/project/kaken2019/</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	林 由華 (Hayashi Yuka) (90744483)	岡山大学・グローバル人材育成院・講師 (15301)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	新永 悠人 (Niinaga Yuto)	弘前大学 (11101)	
研究 協力者	原田 走一郎 (Harada Soichiro)	長崎大学 (17301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関